
Ture Love

神崎泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T u r e L o v e

【Nコード】

N 3 4 3 3 J

【作者名】

神崎泉

【あらすじ】

リストカットをしている少女古谷悠里

そんな彼女を好きになってしまった主人公野々村燈路

そんな2人が織りなすちょっと歪んだ愛憎劇。

本当の愛って何ですか？

序章（前書き）

リストカット、自殺未遂が出てきます。
フラッシュバックにご注意

序章

ある人に聴かれたことがある

「本当の愛って何？」

俺は何も言えずに、その人に苦笑しか返せなかった。

人を愛し始めた今もその問いには答えられそうにない。
そもそも、人を愛する事に答えなんてあるのだろうか？

True Love

僕が愛した人は左手首に傷を負っていた。

理由は単純で、リストカットと言うものだ。

セーラー服の袖から見え隠れする白い布…。

今日は血が滲み始めている。

そんなに深く自分を傷付けているのだろうか？

そんなことを彼女の腕を見つめて考えた。

だけど、そんな彼女に俺はなにも言えない。

それはそのはずで俺は彼女の人生の中で何の役割も果たさないからだ。

彼氏でもなければ、友達でもない。
ただのクラスメイト。

そんな俺は密かに彼女に恋心を抱いているだけ。

彼女には、友達が居ない。

覚えている限りで、今のところ彼女は親しげに人と話しているのを見たことがないが見ていないだけで本当は居るのかもしれない。

だが、彼女は人と距離を置こうとする。

そして、周りも彼女と距離を置こうとする。

それは至極当たり前のことかもしれない。

リストカットをしている思考回路は、一般人には理解し難いことなのだから。

自分を傷付ける行為。

つまり、自傷行為をしている人をろくに知らないのに不審な目で見ると言う方が無理な相談なのかもしれないし、ましてやそれを隠さずに居るし、これでもかと言う程に近寄るなオーラを纏っている友人が居ないと思うのも頷けると思うのだけれど。

しかし、自分はそんな彼女古谷悠里に惚れてしまったのだ。

理由は簡単。

関わったこともない人間に惚れる為にはまず容姿端麗が重要だろう。彼女の笑顔に惹かれました！

なんて一般的な恋愛ラブストーリー的な一目惚れとは違うが、これもまた一目惚れと言うのだろう。

彼女はハッキリ言っただけ美人だ。

学年…いや、学校1だと思う。

ただ、その雰囲気と手首の傷で他人を呼び寄せないだけである。と言っても、たまにその容姿のためか身体目当ての男がたまにやってくるが…

自分もその容姿にやられたと言のもあるが、一番は儚さだと思う。彼女は誰も近寄らせないオーラと共に、儚さを持っている。

窓際でいつも黙って本を読み、読み終わったらぼんやり外を眺める。その一挙一動が魅力的でその度に見え隠れする白い肌にとけ込むように巻いてある包帯がまたその儚さを強調しているようだった。

そんな風に、自分はまんまと彼女の魅力に吸い寄せられたのだが、ハッキリ言って告白なんてしようとだなんて思わない。自分はただ、儚げな彼女が見ればそれで満足なのだ。

「また見てるの？ 燈路」

ぼんやり、今日も窓際の古谷に視線をやっていると幼なじみの田村友香がそう言って、俺の背中に腕を置いて体重をかけてきた。その衝撃に前のめりになりつつ、振り返り友香に迷惑だと視線を送る。

すると、友香は誤魔化すように肩をすくめて正面に回り込み、俺の机に座った。

その時に、短く折られたスカートが更に短くなり足がかなり露出される。

「毎回言っけど、女ならそんな風に足を露出して座るな。」

そう言って、別段惹かれる要素もない足を叩いて机からおろす。友香は不愉快そうにほっぺたを膨らませて

「セクハラー」

とか言っただけで喚いている。

お前の身体になんか興味ないわ。

内心でそう思いつつ「はいはい」っと適当にあしらっておいた。

「もー…燈路はあんな奴の何処がいいの？」

友香が面白くなさそうに、俺の顎に手を添えてそう言う。
何処って…面だ面。
と言いたくなるのを飲み込んで

「あー、五月蠅い」

と言って友香の手を振り解いて立ち上がった。
最近、友香が嫌に付きまってくる。
ウザイったらない。

「もう、燈路冷たいー」

そう言っつて、俺の身体の腕を回してくる。
ああー…気持ち悪い。

内心でそう思いつつ、突き放そうとするが何故か友香は力がある。
くっそ、面倒だな。

「燈路ー彼女か？」

なんて、周りも周りで他人事で冷やかしてくるし
何故かそれを聴いて友香は嬉しそうに「そうだよー」なんて調子乗
っって言っし。

本当にウザイ。

そう思っつてやっと友香の手を振り解いた。

「友香、お前マジでう「ごめん、邪魔。」

友香に文句を言おうと口を開いたが、文句は途中で遮られてその声

に振り返ると、そこにはさっきまで窓辺に居た古谷。
突然の事で驚いて止まっているともう一度大きくはつきりと

「邪魔。」

と言われて、そこで自分がドアを塞いでいることに気がついて急いで避けた。

すると、古谷はさして俺を気にした風もなく出て行った。
恐らく図書館に向かったのだろう。

そう思いつつ、教室を振り返ることなく出て行く古谷の背中を見つめていた。

「燈路、振られちゃったね。」

隣に居た友香がポツリとそう呟いて俺を嘲笑うかのように見上げた。
その目はちっとも笑っていない。

「お前には関係ない。」

俺はそう言って、友香から離れるように教室を後にした。

教室に戻ればまた友香が五月蠅いので俺は屋上に移動した。
屋上は本当は出入り禁止で、普通は人は訪れない。

本当は鍵が掛かっていたが、結構前に俺がサボるために鍵を破壊した。

先生も此処の鍵が破壊されているなんて知らないだろうし、ましてや他の生徒は前に自殺した生徒が居るなんて噂の屋上なんかは訪れたりしない。

屋上のドアは鍵を壊す時に俺が蹴ったせいか若干鈍い音を立てて開く。

しかし、昼休憩の騒音にかき消されてさして目立つこともなくドアは開いて屋上に足を踏み入れた。

ドアを隔てた向こう側は騒がしいが、屋上は静寂に包まれていた。人と居ることがあまり好きではない俺は、その静寂に小さく安堵の溜息を吐き出してから

いつもの定位置である入り口の上にある貯水タンクにもたれかかって、ポケットから煙草を取り出した。

空は青く、風が少し肌寒い程度の屋上。

口から吐き出した煙が風に攫われて霧散していく。

その煙の行方を横目で眺めながら、また煙を肺に取り込んだ。

たつぷりニコチンを摂取して、少し落ち着いた頃

下の方、つまり入り口のドアが大きく音を立てて開いた。

俺は急いで煙草を消し、すぐに息を殺した。

全神経を集中させ、下に意識を集中する。

しかし、目に飛び込んできたのは意外な人物で、俺は自分の目を疑った。

そこに居たのは、古谷だった。

一瞬驚いたものの、余計にはばれるわけには行かなくなった俺はその場に黙って居座った。

古谷の動向を観察するが、彼女は目を細めてから空を見上げて、静かに手すりに近づいた。

本来なら、手すりではなくフェンスなのだろうが、この学校は鍵が掛かっていたためフェンスに改装されることなく手すりのままだった。

彼女は腰の辺りまである手すりに手をかけ、下を覗く。

暫く上を向いたり、下を覗いたりを繰り返してから、彼女はポケットから静かに手紙を取り出した。

真っ白い封筒を置き、その横にやけに丁寧に靴を脱ぐ。

…これって自殺？

古谷の一連の動作を見て、俺はその自殺を言う単語を思い出し、急いで下に飛び降りた。

俺が飛び降りた音に気がついたのか、古谷が振り向く。

そして、彼女は俺の存在を確認すると手すりを乗り越えようとする。しかし、俺は運動は大の得意。

入り口と手すりにさして距離がないため、彼女が飛び降りる前に手を掴んで引き寄せた。

華奢なのは外見から分かっていたが、思ったより軽い彼女の身体は簡単に俺の胸に納まる。

「離して、離してよ！」

そう言って、暴れる彼女。

しかし、俺は離す気などさらさらない。

「やだよ。」

俺はそう言って逆に、強い力で彼女を抱きしめた。

すると、彼女は俺の手に爪を立てる。
しかし、なおも俺は離さない。

「ヤダ、離して！どうせ私なんて要らない癖に、身体目当ての癖に、もう死なせて…」

強かった口調は段々涙声に変わり、彼女はついに泣き出した。

静かに涙を流す彼女は美しい以外の言葉では言い表せない気がした。

「要るよ！古谷さんは俺に必要な人だから。」

俺はそう言って、彼女の涙を拭う。

涙を拭われた彼女は驚いたように目を見開いて、俺の顔を見つめた。

もしかしたら、この瞬間、初めて古谷と目があつたかも知れない。
そんなどうでもいいことを内心考えつつ、古谷の頬に左手を添えた。

「好きだから、死なないで」

そのまま、古谷が目を閉じたので、俺は古谷にキスをした。

軽いキスをして、彼女から唇を離すと彼女の平手打ちが俺の左頬を打った。

少しじんじんする左頬を自分の左手で覆ってから、彼女をみやる。

彼女は強い意志を秘めた目に涙をまた浮かべて

「身体目当ての癖に、簡単なこと言わないで！！」

と言って、その場にしゃがみ込んで泣き出した。

俺は彼女の靴と、靴の横に置かれた、遺書と言う文字が丁寧に書き記された封筒を手に取り、彼女に差し出した。

しかし、彼女は顔も上げず、静かに涙を流し続けた。

日が傾いて、空が赤くなっていく頃、彼女はようやく泣きやんで、俺から靴と封筒をひったくるようにして奪って封筒を乱雑にスカートのポケットにねじ込み、靴をはき始めた。
俺はそんな古谷を見て

「ねえ、告白の返事は？一世一代の大勝負だったのに。」

つと言って、古谷を見下ろす。

すると、古谷は少し考えるように手を止めて、俺に不適な笑みを見せた。

「じゃ、私が望んだこと全部してよ。そしたら付き合っただけよ。」

彼女は決して俺がそんな条件をのまないと思ったのだろう。
しかし、俺は彼女の見下して

「分かった。姫の仰せのままに」

つと、ふざけてひざまずき、古谷の手の甲にキスを落とした。

コレが全ての序章なんてきつとこの時俺は思ってもいなかった。

序章（後書き）

はじめましてまたは、お久しぶりです。
神崎泉です。

前回の長期連載が終わり、1年ぐらいの年月を経て、再び新たな小説を書くことにしました。

つと、言いますか…最近自分のHPを設立してしまって、そちらで少し同人要素を含む活動で執筆作業をしてしていたので、余裕が少しづつ出てきたのでオリジナルの方にも手を出そうかなー…
ってなことでこういう形でオリジナルを再び書くことにしました。

話の内容は前の長期連載とは少し違った感じで歪んだ愛がテーマです。

最近作者は猟奇的殺人なんかに興味があるので、こういう感じな話になりました。

今回もまったくの無計画で書いていくので話の展開なんかは作者にも未知数です。

しかし、沢山の人に楽しんで頂ける小説になればいいなっと思っております。

宜しければ、応援お願いします。

レビュー、評価は随時受け付け中です。

誹謗中傷は止めて下さい。

管理人はガラスのハートです。

↑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3433j/>

Ture Love

2010年10月9日03時26分発行